





シューベルト:

F. Schubert

ピアノ五重奏曲イ長調「鱒」 作品114

Quintet for piano, violin, viola, cello and contra bass «The Trout» Op. 114

一休憩 —

ショパン(ケナー、ドンベック編): ピアノ協奏曲第1番ホ短調 作品11(室内楽版)

F. Chopin

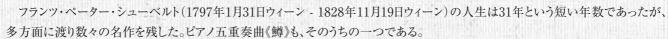
(Ed.: Kevin Kenner, Krzysztof Dombek)

Concerto No.1 in E minor, Op.11(for piano and string quintet)





F. シューベルト: ピアノ五重奏曲イ長調《鱒》 作品 114



編成は、通常のピアノ五重奏曲(ピアノ・第1ヴァイオリン・第2ヴァイオリン・ヴィオラ・チェロ)とは異なり、ピアノ・ヴァイオリン・ヴィオラ・チェロ・コントラバスという珍しい組み合わせ。全体は五つの楽章から成り、第4楽章に自作の歌曲《鱒》の調べを主題とした変奏曲が置かれている事から、この題が付けられた。

作曲は1819年。この年の7月、シューベルトは友人で歌手のヨハン・ミヒャエル・フォーグルと共に北オーストリアのシュタイアー地方を訪れており、そこで出会った有力な音楽後援者で、チェロ奏者でもあったジルヴェスター・パウムガルトナーからの依頼が作曲の動機となった。コントラバスを加えた編成は彼からの注文であり、通常の編成でチェロが担っている「低音で演奏の土台を支える役割」をコントラバスが担うことで、チェロ奏者を音楽的に開放し、自由にしている。また、歌曲《鱒》を好んでいた彼は、曲中にその旋律に基づく変奏曲を組み込む事も希望した。

この曲は、曲の全体を通して感じられる煌びやかさや朗らかさ、そして純粋さがとても印象的である。シューベルトはシュタイアーの地の事を「考えられないくらい美しい」と表現しており、曲中には、シュタイアーの爽やかな自然や素晴らしい景色、そしてシューベルトがそこで過ごした幸福なひとときが良く反映されている。彼の人生で最も幸せな時期に生み出されたこの名曲は、今も人々に愛され、そしてこれからも愛され続けるだろう。

第1楽章: Allegro Vivace

この時代の多楽章作品の通例通り、ソナタ形式を取っている。曲の始まりにふさわしい、優美で明るい楽章。

第2楽章: Andante

あたたかく柔らかい、そしてどこかメランコリックな響きを持った緩徐楽章。 色彩感溢れる、大胆な転調が特徴的。シューベルトの歌心が存分に表れている。

第3楽章: Scherzo: Presto - Trio

喜びと希望に満ちた、躍動感溢れる楽章。

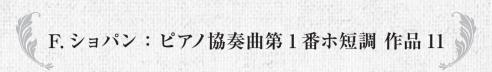
弾むようなリズムで、弦楽とピアノの会話が行われる。

第4楽章: Andantino - Allegretto

全曲中の核心を成す楽章。美しい《鱒》の主題が弦楽によって提示され、華やかな音型の変化によって五つの変奏が行われた後、 コーダへ進む。

第5楽章: Allegro giusto

軽やかで民族舞曲風の主題に明るさを持った旋律が加わり、一度曲は小さく終結する。後半部分では、前半部分が移調され、晴れやかに全曲を締めくくる。



フレデリック・フランソワ・ショパン(1810年3月1日ワルシャワ近郊のジェラゾヴァ・ヴォラ - 1849年10月17日パリ)が作曲したピアノ協奏曲は全部で二曲あり、両曲は一年のうちに立て続けに作曲されている。今日演奏する作品11は後に書かれたものだが、出版の時期が前後した為、第1番の番号となった。

作曲されたのは1830年、ショパンが20歳の時である。当時、ショパンは同じ音楽院で学ぶソプラノ歌手、コンスタンツィア・グワドコフスカに熱烈な恋心を抱いていたが、内気な彼の性格からか彼女に気持ちを伝えることはできなかった。彼の中を渦巻く彼女への想いが、作品の完成を後押ししたとも言われている。

以前よりショパンは、家族や友人達から外国へ行く事を勧められており、同年11月、迷いながらもそれを決意しポーランドを旅立つ。旅立つ直前に行われた彼の告別演奏会において、ショパン自身のピアノ演奏でこの曲の初演が行われた。1832年に行われたパリでのデビュー演奏会でも、弦楽五重奏版でこの曲を披露し大成功を収め、それをきっかけに出版される運びとなった。

ショパン自身がこの曲を演奏会で披露する事が多かったことから、この曲は彼の自信作であったのだと思われる。後に作品は、パリでのデビュー演奏会を後押しした名ピアニスト、カルクブレンナーに献呈された。

『ピアノの詩人』との呼び名も持つショパンだが、この曲のシンプルで慎ましい旋律は、故郷への告別の意と強い愛国心、未来への希望、そして若き青年の熱情的恋心を、まるで彼が書いた詩や手紙を読むかのごとく真っ直ぐに語りかけてくるようだ。

第1楽章: Allegro maestoso ホ短調 4分の3拍子

協奏曲風のソナタ形式。

長く重々しいオーケストラのみの序奏に続き、ピアノの決然とした冒頭、哀愁漂うホ短調の第1主題と甘く優しいホ長調の第2主題が歌われる。その後展開部では、先程とは打って変わった技巧的な面を見せ、鮮やかに転調を繰り返しながら曲が進む。再現部では、第1主題と第2主題が再現された後、コーダによって曲が盛り上がり、オーケストラによる冒頭部分への回帰で曲が締められる。

第2楽章: Romanze, Larghetto ホ長調 4分の4拍子

初演当時のテンポ指示はAdagioであった。弦楽が和声を奏で、ピアノはその上で夜想曲(ノクターン)風の旋律を歌う。

ショパンが親友ティトゥスに宛てた手紙では、この楽章の事をこのように書いている。『僕はここでは力強さなど求めはしなかった。 寧ろ浪漫的な、半ば憂鬱な気持ちで、楽しい無数の追憶を喚起させるような場所を眺める印象を起こさせようとしたのだ。例えば美 しい春の月明かりのような…』

第3楽章: Rondo, Vivace ホ長調 4分の2拍子

これまでの楽章に比べて音数も多く、色彩感に溢れる楽章。

オーケストラの短い序奏の後にポーランドの民族舞踊「クラコヴィアク」調の典雅なロンド主題が現れ、オーケストラとピアノの対話、 左右のユニゾンで奏でられる落ち着いたエピソードを挟みながら、壮大なクライマックスへと向かう。最後は、高度なピアノの技巧が 煌びやかに鍵盤を駆け巡り、力強く全曲を終える。

今日はピアニストのケヴィン・ケナー氏の編曲による室内楽版で演奏いたします。

* * *

最後になりましたが、本日共演してくださるワルシャワ・ストリング・カルテットの皆様とコントラバス奏者の新 眞二様、この公演に関わってくださった方々、そして聴きにいらしてくださったお客様に、厚く御礼申し上げます。

素晴らしいこの二曲の音楽が皆様の心の糸に触れるものでありますように。感謝の気持ちを込めて、精一杯演奏させていただきます。